

# 笛吹市探訪

## 武田氏と笛吹市⑬

―武田勝頼(かつより)の息子の墓―  
 芍薬(しやくやく)塚(春日居町)―

今回は、春日居町鎮目地区などを舞台に、芍薬塚と晩年の武田勝頼の様子を紹介します。

天正(てんしょう)10年(1582)、織田・徳川連合軍が甲斐国に攻め込みます。甲斐国の領主武田勝頼は自ら新たに築いた新府(しんぷ)城(韮崎市)に火をはなち、小山田信茂(おやまだのぶしげ)がいる岩殿(いわとの)城(大月市)を目指して落ち延びていきます。

甲府を抜け、岩殿城に向う途中、鎮目村(春日居町鎮目)で勝頼は渡辺加兵衛(かへえ)(武田家家臣)に2歳の幼児を預けました。しかし、

幼児は翌年3月7日に病気で亡くなり、加兵衛によって屋敷の一角に埋葬されました。

それが旧芍薬塚で、御室(みむろ)山麓の一丁田(いつちようだ)にあります。塚には幼児が好きだった芍薬が一株植えられ、墓標とされました。

文化4年(1807)、渡辺孫太郎兵衛(そんたろうべえ)たちは、荒れ果てた旧芍薬塚を不憫(ふびん)に思い、屋敷内に移しました。それが、春日居町鎮目小字的場にある芍薬塚(笛吹市指定史跡)です。彼らは、塚に石碑を建て、石碑の



旧芍薬塚



芍薬塚



勝頼の墓・発掘状況  
 (甲州市教育委員会提供)

周りに旧芍薬塚から株分けした芍薬を植えました。

石碑は高さ1、幅39cm、奥行きは33cmあります。石碑の文章は富田武陵(ぶりよう)が選び、自ら書きました。石碑の正面には「天正十年武性院殿音理周哲大童子(ぶしょういんでんさいりしゅうてつだいどうじ)」と刻まれ、側面から後面にかけては芍薬塚の由来が刻まれています。

また昭和時代、旧芍薬塚は、畑の一角に目印の石が置いてあるだけの状況でした。近年、有志により旧芍薬塚の整備が行われ、新たに「五輪塔」・「由来を刻んだ石碑」が設置されました。

さて、鎮目で幼児を預けた後の武田勝頼とその一行は、鎮目村を通った後、岩殿城を目指しました。しかし、岩殿城主小山田信茂が武田家を裏切り、岩殿城に入る事ができなく



勝頼の墓・経石出土状況  
 (甲州市教育委員会提供)

なりました。やむなく天目(てんもく)山(甲州市大和)に登ろうとしますが、敵襲(てきしゅう)にあい、田野(たの)村(甲州市大和)で自刃(じりん)します。

勝頼夫妻・信勝(のぶかつ)(勝頼の息子)は景德院(けいとくいん)(甲州市大和)に葬られました。「武田勝頼の墓」は山梨県の史跡になっています。甲州市教育委員会が発掘調査を行い、経文や勝頼の戒名(かいいみよう)を書いた「経石(きょうせき)」が約5300点見つかりました。

武田勝頼が亡くなり、戦国大名武田家は滅びます。しかし、武田家の家臣達は武田家滅亡後、徳川家康などに仕え、甲斐国や日本各地で活躍します。

「武田氏と笛吹市」シリーズは今回で終了します。次回からは、笛吹市の歴史や文化を紹介していきます。